

天城山概要と今後の展望資料

文責 環境カウンセラー

山口康裕

天城山誕生の歴史と由来

天城山の誕生：約100万年前に本州に衝突した伊豆半島で80～20万年前に成層火山として噴火を繰り返した大きな火山であった。噴火の終焉に伴い浸食が進み山頂部が失われ残された山腹の最高地点が万三郎岳となった。

天城山：半島中央部をJ字型に走る連山の総称であるが、ジオ的には東西15km、南北20kmにおよぶ複合火山、中央火口丘の白田山を囲み、箒木山、万二郎岳、万三郎岳、白田峠、八丁池、三筋山を結ぶ尾根が、南東に開いた馬蹄形の外輪山を指し、一般的には外輪山の一番高い部分の万三郎岳（1406m）を天城山と呼んでいる

天城山の由来：多雨地帯から「雨木」→「天城」との説と甘茶を作るウリ科のアマチャ蔓と同様にヤマアジサイの仲間葉に糖分を含む甘い木から甘茶を作ることが出来る植物がこの山地に多かった事から「甘木」→「天城」説があるが学名に amagianaを持つアマギアマチャがこの山地に多くアマチャの文化を考えれば甘木説が妥当ではないかと考える

天城山の歴史背景

江戸時代：幕府の天領-天城九制木（ヒノキ、スキ、アカマツ、サワラ、クス、ケヤキ、カシ、モミ、ツガ）は公用以外伐採禁止→御礼杉

明治時代：官林となり静岡県が管理→明治22年御料林、宮内省管理

昭和時代：昭和6年に国有林化→昭和32年に国立公園法が改正され自然公園に分類

伊豆半島森林面積：97,000ha: 天城国有林44,134ha-8割がスギ、ヒノキの人工林
山頂部：ブナ、ヒメシャラ、アマギシャナクナゲの天然林

各ピークの標高と植生

1. 万三郎岳（伊豆最高峰北1,406m）、万二郎岳（標高1,299m）

長九郎山（標高996m—キョウマルシヤクナゲ自生の南限地）

2. 八丁池—標高1,170m（八丁池展望台—標高1,207m）

周囲560m（5.1丁）、深さ1.19m、

3. 伊豆半島の垂直分布植生

標高約600m 以下—暖温帯林（アカガシ、イチイガシ、シラカシ、アラカシ、スダジイ、タブノキ、カゴノキ、ヤブニッケイ、イヌガシなどの常緑広葉樹）

標高約600m 以上—冷温帯林（ブナ、ヒメシャラ、ヒコサンヒメシャラ、シナノキ、カツラ、キハダ、イタヤカエデ、ホソエカエデ、ハウチワカエデ、オオモミジ、リョウブ、イヌシデ、ミズメ、ハリギリ、ミズキ、コシアブラ、オオカメノキなどの落葉広葉樹とアセビ、シキミの常緑樹、モミ、ウラジロモミ、ツガ、コメツガを主とするに針葉樹）

4. 天城山で見られる主な植物

トウゴクミツバツツジ、サラサドウダン、チチブドウダン、ヤマツツジ、マメザクラ、ミドリザクラ、キバナツクバネウツギ、フタバアオイ、イワカガミ、トオゴクサバノウ、ウスキヨウラク、イワウチワ、ツルアジサイ、キクザキイチゲ、イワナンテン、イワオモト、ヤシャビシヤク、イワカガミ、イワタバコ、カンアオイ各種、

5. 天城山固有種

アマギツツジ、アマギシヤクナゲ、アマギベニウツギ、アマギアマチャ、アマギテンナンショウ

今後の課題

- 1 植生保護のための鹿の頭数調整
頭数調整に関して詳細なモニタリングを行い、過駆除につながらない厳密な施策が必要
- 2 マメザクラ・ブナの植生回復ゾーン設置：
保護柵の設置と合わせ市民協力を通して苗木の育成と植林の強化
植林に際しゾーニングを行い重点的な回復ゾーンを設置
- 3 縦走路の整備と部分的木道の設置：
シャクナゲの開花期における植生破壊（特に林床植物）が著しく
万三郎岳手前のブナ林の腐食層が流亡し根が無残にも露出しており
早急にこの部分だけでも木道を敷く必要あり
- 4 シャクナゲの鑑賞マナーの徹底
この時期、花を求めて縦走路を離れるハイカーが多く、群落地には単なる「植生保護－立ち入り禁止」のボードではなく現状認識につながる解説板の設置が必要
- 5 縦走路標識板の再整備
水生地からの八丁池への縦走路における標識の破損及び不備が見られ
安全な登山が損なわれている懸念がある。早急な対応が必要
- 6 環境省の国立公園管理の在り方
日本の環境行政予算は他の省庁と比べ極めて低いため国立公園の維持管理に関しても人材を増やせずぎりぎりの状況下で動いている。そのため切迫する状況に対しても対応が出来ず市民からの提案を受け入れる余裕も無く状況放置に近いのが現状である。この悲惨な状況を打破するためにも市民団体を受け入れ早急な対応のできる政策転換へと舵を切るべきであり、伐採を行う団体だけが森林税の恩恵に与る制度からの大局的見地から地域の森林保護に貢献しうる団体とのコラボを積極的に受け入れる決断が今まさに国の森林行政に必要とされている。

2016 伊豆新聞

天城山と伊豆のルネッサンス

天城のブナと語る会 代表 環境カウンセラー 山口康裕

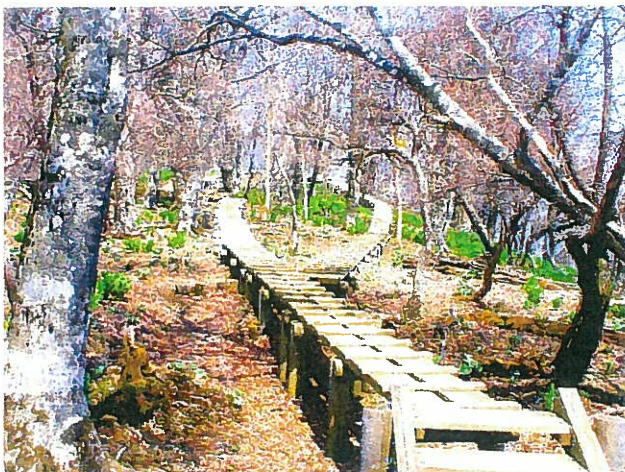
これまでこの紙面で天城山は様々な角度より語られ、読者の方々は四季それぞれの素晴らしさ、摩訶不思議さ、冬期登山の危険性、加えて天城山周辺の事例等、その全体像をより具体的に理解された事でしょう。最終回は今後の天城山のあり方について触れたいと思います。今、日本の山々には山ガールと呼ばれる女性達や中高年登山者が闊歩しています。近年の登山環境の変化が彼らを惹きつけていると言えます。整備された縦走路、改築された山小屋の快適さと利便性、バイオトイレの清潔な環境整備等が主な理由として挙げられます。年間40万人を超える丹沢山系の登山者数は上記の事例がもたらしたとも言えます。伊豆半島が世界ジオパーク認定を得た暁には天城山を訪れるハイカーが間違いなく増加します。現在でも5月のシャクナゲの時期には台湾、韓国からのハイカーがバスを仕立てて訪れていますが、縦走路整備が不完全なため植生の踏みつけ、山道の浸食幅等の問題が発生しています。世界認定、インバウンド政策を含め将来を見据えた時、天城山の様々な課題が浮かび上がってきます。伊豆半島の経済振興と登山者の安全を考えれば山小屋の設



(写真① 天城山の無残な縦走路)

置が求められますが、現状を鑑みれば原資となる天城山の自然を保全する登山道整備が最優先されねばなりません。写真①は万三郎手前のブナ林を通る縦走路ですが表土は流亡しブナの根は無残にも露出しています。写真②は西丹沢檜洞丸に通じる縦走路で植生保護のために木道が敷かれています。この木道を歩く時、登山者はこの山が環境保全と自然愛護の精神で管理されていることを実感することになります。更に木道設置は植生保護のみならず登山者に環境保全の必要性とその支援のための協力金として入山料の是非を問う契機にもつながります。確かに国立公園内の木道設置は法令を含め持続的な整備費やその担い手の確保等課題が山積していますが、行政と各種団体が協働すれば適正な整備手法を確立することは可能な筈です。現に伊豆のライオンズクラブからは木道設置

の資金援助の申し出があり、一筋の希望となっています。世界ジオパーク認定やインバウンドの影響を待つだけでなく、積極的に天城山の保全と利用のための協議を行い、木道設置の実現化を図り、環境を保全しつつ登山者のニーズに対応できる取り組みの具体化を今進める必要があります。天城山を核とする伊豆のルネッサンスの開花は行政と私達のやる気にかかっているとと言えます。



(写真② 丹沢檜洞丸の木道)